

シビルウエディング
ミニスターが語る

心に残る挙式

同じ職場に勤務する男女が結婚式を行わず入籍をすませただけで新生活を始めた。が、職場の同僚たちには、何か物足りない。そこで有志が「ふたりに内緒で職場主催の結婚披露パーティーを開こう」となりました。

幹事に選ばれた人たちが私の勤務するホテルに来館、会場等の状況を確認してから、パーティーの日取りを本年3月に決めました。

幹事を中心にパーティーの準備は秘密裏に進められたものの、当日まであと数日というところで、「さて、挙式をどうするか」となり、当館のブライダル担当者に「人前式でやりたいのだが何かいいアイデアはないか」と相談にこられました。

「弊社には、列席者の皆さんが証人になる形式の、シビルウエディングを司るミニスターがいます。彼と相談されてはいかがでしょう」と、担当者は幹事の方々を私のところに案内してきました。シビルウエディングについて私が説明を始めると、5分もしないうちに「それがピッタリ」と早々に細かい打ち合わせに入りました。

とにかく、結婚したふたりには内緒でコトを選ばなければなりません。打ち合わせが終わってから、私は、どのように挙式を進行させよう、通常、本人たちが事前に準備している誓いの言葉をどうしようなど心配になりました。反面、初めての体験を迎え、心はワクワクしました。

当日、ふたりは同僚たちから「せめて記念の写真だけでも撮っておいたら」と説得され、幹事に付き添われて弊社に来館、そのまま“写真室”と偽って会場に案内されました。

扉が開くと会場内から上司や同僚など60人の、出席者であり、同時に結婚披露パーティーの主催者でもある人たちから大きな拍手が沸き起こりました。

何が何だかが分からないままふたりは、幹事に導かれ正面のステージに設えた挙式場へ向かいます。そこでふたりは初めてこれは自分たちの結婚式だということに気づきました。

ふたりには誓約の言葉の準備がないため、私は用意した12本のバラが意味する愛の言葉を説明しながら式を始めました。

「新郎新婦」は、ただただ涙です。結婚式に「感激の涙」はよくあることですが、この日のふたりの涙は、職場の人たちや友人たちに対する「感

会社の同僚たちの、
友愛に満ちた結婚式

謝の涙」でした。

ふたりはすでに結婚指輪をしています。そこで私は、シビルウエディング・ミニスター養成講座に出席したときに学んだ、指輪交換の歴史と意味の説明をしました。

「互いに相手から贈られた指輪を薬指にはめているのは、西洋で昔から行われてきた慣習です。婚約指輪は、リングではありません。一か所切れています。これは、約束はしばしば破れます。でも、婚約だけは破れないようにと願って、古人は切れている箇所にダイヤモンドのような硬い鉱石をつかったのです……よくご覧ください。いまおふたりの指にあるのは結婚指輪です。それには切れ目がありません。完全なリングです。

そして、薬指は心臓、つまりハートに直結しているのです」

最後は、会場から一斉にグラスを叩く音が始まりました。キスをせかす催促のグラス音の中で、ふたりがキスをして、無事シビルウエディングによる挙式を終えることになりました。

過去に私は、友人たちが主催する披露パーティーの中で、サプライズの挙式を司る役をしたことがあります。しかし、

今回のような、挙式はもとより披露露パーティーまですべてがサプライズというのは初めての経験でした。

私の住む北海道の結婚式は、会費制が主体で友人たちが世話役を務めるのが一般的でした。

でも昨今は、新郎新婦がすべての準備をするようになりました。その結果、列席者のことを考慮せずに、自分たちだけが満足する内容の結婚式が多くなりました。もちろん、新郎新婦が満足することは大事ですが、会場に来られる、これまでふたりを育てたり、励ましたり、相談に乗ったりしてくれた親族や友人知人に対する感謝の気持ちもてなしの心を忘れてはいけないなと思います。

職場の人たちが内緒ですべてを準備してくれた結婚式の司式を務めた経験は、私に会費制本来の精神をもう一度見直すべきだということを教えてくれました。同時に、北海道独特の会費制の挙式には、シビルウエディングがピッタリだと思いました。



シビルウエディング・ミニスター
藤井芳和氏

(ふじい・よしかず。1960年生まれ。2002年にミニスターの資格を取得。(株)トップオブ釧路勤務。これまで約80組の挙式を司る)

訂正

第753号 連載11シビルウエディングミニスターが語る「心に残る挙式」において、筆者と異なるプロフィールを掲載いたしました。正しくは「(うちだ・かずお) 1948年東京生まれ。2005年シビルウエディング・ミニスター資格取得。現在、医療法人士会勤務」です。ここに訂正いたします。